

心の力

シーブーラパー
訳 宇戸優美子

若人諸君！ 二〇歳から二五歳の年齢にある君たちは、健康な肉体を持ち、血管には熱い血潮がたぎっている。いっどこであろうとも、君たちは歓迎と悦楽に囲まれている。オフィスの仕事に疲れたって？ あっちにほら、君の身体と心の疲れを吹き飛ばしてくれるテニスコートがあるじゃないか。夕暮れ時に一息ついてからクラブやホテルでの社交に出かけた方がいい。あるいは、夜中に君のお気に入りの場所に行くのももちろんありだろう！ それは寒すぎるって。君は防寒着を持っているだろう。それを着たまえ！ ほう！ 上等な羊毛のセーターじゃないか。そっちはビロードの襟巻き。それからなんだ。揃いもそろって高級品ときてる。そして向こうだ。そう、君がこれから出かける場所さ。美しく着飾った紳士淑女が集う享樂の場所。甘美な顔と笑い声に満ちた場所。愉快的な会話が君

の心を解放し、どこを向いても目と心を捉えて放さない光景がそこには広がる。時に、君の視線はある女性の視線とぶつかり合う。その瞬間、瞳はぱつと輝き、君の心臓の鼓動は高鳴る。血潮が激しく全身を駆け巡り、君は言いようのない感覚に襲われる。そして家に帰った後も、君は一晚中甘い夢を見ることができるようになるのさ！

君の人生はじつに羨ましい。奪い去ってしまいたいくらいにね。睡眠薬を使ってそうする手もある、そんなことが可能だったらの話だが。まったく、君はなんと幸せに満ちていることか。まるでこの世界が、他の人間のものではなくただ君一人のものであるかのようだ。太陽の光も月の光も、いついかなる時も君に仕える奴隷になる。君の身体から放たれるのは幸福以外の何物でもない。そう、幸福、幸福なんだよ！

でも、そんな君がこの事実を理解できないのはじつに不思議なことだ。それどころか君はむしろ強く否定するだろう、自分は多くの人が考えるような完全な幸福などではないと。なぜなら君は独身で、ある一つのことを望んでいるからだ。それは、君の意中にある美しい女性からの愛だ。君は彼女と結婚したいと思っているし、誰からもその女性を「すごいね、君の愛妻はほんとうに可愛いね」と言われたがつている。そうなれば、君は完全な幸福を手に入られるからだ！

君の心はそうだったところじゃないかな。よしてくれ、とぼけてくれるな。若人諸君、ぼくらはみんな、同じ男なんだ。違うのは君がまだ独身だということだけだ。ぼくの場合は、独身でもあるし、独身でないともいえる。分かるかな！

おやおや！ 君は愛が欲しいって。美しい妻が欲しいって。手に入れば君は完全に幸福になるだって。誰がそんなことを君に吹き込んだ？ 科学者が記した本に、結婚した人間の寿命が独身者よりも長いとあったから？ 作家の書いた文章に、愛は生命を新鮮なものにしてくれる染料のようなもので、人生を楽しくさせ、昼も夜も夢を見

させてくれる長命薬のようなものだといったから？ それとも、既婚者が君に、まるで天国のような生活だと自慢話を繰り広げたせいかな。へえ！ よほど愚か者の天国らしい。で、君はそれをすっかり信じたつてわけだ。それともまだ他にもあるのかい！

まったく話にならない！ そうさ、君はいま述べたような道具によって騙されているんだ。あるいはぼくがまだ挙げていない何かによってね。どれか一つじゃきかず、もしかするとそのどれも当てはまるのかもしれない。君は哀れで、そして恥ずかしくなるほどに騙されているんだ。まるで母親の手にかかった赤子のようにね。あるいは若い乳母にあまりにも簡単に寝かしつけられてしまう赤子と同じように！

君は自分が騙されているなんて信じないだろうが、それはこの際どうでもいい。無理矢理分からせたいわけじゃない。これから話すことは、君によかれと思って話すことだ。ぼくが君に信じてもらいたいという切実な気持ちでいることを知っておいてほしい。そしてこれから話すぼくの個人的な事情を煩わしく思わずに聞いてほしい。

ぼくがまだ若く、独身だった頃のことさ。ぼくはいま

や独身ではなくなったけれど、それでも若さはまだ十分保持しているつもりだ。あの頃のぼくは、いまの君と同じように騙され、まやかしの言葉をすっかり信じ込んでいた。君たち若人が一人残らず恋愛に夢中になるように、ぼくもまた胸をかつかと熱くしていたんだ。仕事が引けると、ぼくはただ一つ、つまり女性のこと以外何も考えられなくなつた。女性と愛し合い、美しい妻を得ることだけをひたすら考えていた。もし希望通りの妻を得られたら、ぼくは選ばれた男にしか与えられない幸福を手にすることができると！

ところが、ぼくはどうにも手に負えない男でもなかったし、あるいは実際ぼくよりずっとくだらない男たちの中で最も良い人間として賞賛を受けるべき男ですらあったのに、なぜか他の男のように美しい妻を得ることができずにいた。

それでも、紆余曲折があつたあと、ついにぼくはある女性と結婚した！

ぼくが彼女を妻に迎えることができた経緯について、詳細な説明をしろだつて。その必要はないね！ 大事なのは、ぼくが妻を欲していて、そしてそれを確かに得たという点なんだ。残された問題は、それによってぼくがかねてから

夢見ていた最大級の幸福を得たのか、あるいは天国にたどり着くことができたのか否かという点だ。

天国さ！ 確かに。ぼくらのような若い男にとって、最初の六ヶ月間はね。いや、すまない。ぼく一人にとつてというべきかな。ぼくにとつて天国だったのは事実だ。だけど時間というやつは果たして止まったままだろうか？ そうじゃない。今日は一日目。それで、愛する人よ、明日は何日目だ？ 二日目！ それも終わる。ぼくの天国は終わつていく。また一日が経ち、明後日になる。もう明後日さ！ そうして、ぼくは妻がいるという六ヶ月を過ごした。あとに残つたのは嘲笑の影だけだった。ぼくの天国の日々は終わつた。もうそんな日々は残されていない。そして幸福もあつという間に失われた。

こういうことなんだ！ 妻を得た人間の人生とは。君ね、まったく何もないんだよ。誰かの言うことなんか信じちゃいけない。誰かがやってきて、妻ができるとこんな風に幸せだとか君に熱弁を振るつたとしても、もし追い払えるのなら、そんなやつは追つ払つてしまえ。そんなやつと言葉なんていうものはね、ぞつとするほど嘘だらけなんだ。結婚した人間の人生が、永遠に続く幸福だなんてちつ

とも思えない。夫婦でいる間に何があるっていうんだ。毎日抱き合ったり、接吻したり、ご機嫌を取ったり、背を向け合ったりするだけで、よくよく妻を見れば、良い格好をしようとする姿ばかりが目につく。同じような格好つけでも、それが上手な妻であればその夫に少しは長く天国の夢を見させてあげられるかもしれない。だけど、ぼくの妻の格好つけはどがいいのか、さっぱりだ。確実に言えるのは、彼女がぼくに天国を見せてくれたのは、六ヶ月だけだったということだ！ うんざりしない男がどこにいる。だって、抱き合ったり接吻したりする以外、何もなかったから。ぼくが彼女の天国に迷い込まざるを得なかったこの六ヶ月は、決して短い時間じゃない。君たちの中の誰かだったら、ぼくほど長く天国にいることもないかもしれないけど。

だけども、つまりぼくの結婚生活が八ヶ月目を迎えたいま、ぼくがどう感じているかつて。彼女に飽きたかって？ ふん！ どうしてぼくは〈飽きた〉という言葉だけを口にしてるんだ？ ぼくには〈百飽き〉〈千飽き〉〈十万飽き〉という言葉を使う正当性がないといでもいうつもりか？ いや、必ずそれを使ってやる。だってそれが

真実なんだから！ それで、いまぼくがどこにいるかだって？ どうして君たち若人は想像ができないのか——地獄だよ！ そうさ。彼女がぼくに天国を与えられなかった以上、彼女にいつたいどんな能力が残っているっていうんだ——地獄を与える以外にね！

誰がこんな地獄なんという場所にいたいものか。その名を聞いただけで身の毛がよだつ。独身生活と非独身生活について、君はどう思う。何の制約もなくいつでも色んなことがやれる幸福を保持したいか、それともたった六ヶ月の幸福と引き換えに二度と浮かび上がるチャンスのない地獄に蹴り落とされる方を選ぶか。君ならどっちを選ぶ？ もう真実を知った以上、君は絶対にぼくの歩いた道をたどる気はないだろうね。でもぼくは愚かだったせいで誘惑に負けてしまった。だとしたらぼくはこれからどうすればいいのか。無論、ぼくはただ手をこまねいてこのままずっと地獄を味わうだけの馬鹿じゃない。彼女がぼくに天国を与えてくれない以上、ぼくは全力で闘わなければならぬ。彼女と同じ性である人間は他に千も万もいるが、その女性たちがぼくに天国を見させることができないといでもいうのか？ いや、必ずいる。それができる女性は必ずい

る！ 残された問題は、志願してくる女性を探すことだ。あるいはぼくが自分から申し出ていくことさ。そして助け合つて必ず天国を築くんだ！

本当のところ、妻のチャームはぼくより能力のある玄人さ。決して価値のない女性なんかじゃない。彼女は美しい天国を築くのに十分な相手だし、性格も申し分ない。ただ不思議なのは、彼女がたつた六ヶ月という期間しかぼくを虜にできなかったということだ。いまとなつては、ぼくは彼女に退屈しか感じない。そう、退屈というのがこの場合の最も適切な言葉だ。なぜって、ぼくは彼女を嫌っているわけではないし、いまでも少なからず彼女を愛おしく思っているからだ。でも、彼女がもはやぼくを天国に導いてくれない以上、何ができるっていうんだ。ぼくは一人の凡人に過ぎないし、地獄の穴にずっと落とされたままで耐えられるものか。まだ肉体はこんなに健康なんだから、身の丈に合った新しい相手を探さなくては。そうすれば君のことも失望させなくて済むつもんだ。

ここまで長々と語ってきたのだから、もう君にはいまのぼくが何を考えているかまるきり伝わっているだろうね？ ぼくの言葉が明確に意味しているのは、新しい妻を求めて

いるということだ。ぼくは妻を取り替えたい。嫌いだからではなく、妻はぼくが望むような幸福をもたらすことができないからだ。もし君が妻のチャームに同情でもしようものなら、彼女は傷つくかもしれない。君はむしろぼくを哀れむのを忘れるべきじゃない。退屈な気持ちを抱えながら妻と暮らすというのがどんなにうつとうしいか、自分で体験してみないと君に分かりはしないだろう！

ここまで聞いた君はきつと、ぼくがすでに新しい相手を得たのか否かを知りたくなっているだろうね？ もしぼくが口ごもって、歯切れ良く語らなかつたりしたら、君はきつと怒るだろう。ぼくのことを人に際限なく猜疑心を抱かせるならず者だと言つて。もし君がぼくと同じ立場に置かれたら、つまり新しい相手を探すようになったら、ぼくがそれに成功したのか失敗したのかを知りたいだろうね。成功したなら、君だつてぼくと同じようにできないわけはないんだから。

いいだろう、これからそれを語つてあげるさ。だが、これから君たちにあることを訊くけど、それでぼくが若人諸君を馬鹿にしているだとか非難しないでくれよ。訊きたいのはつまり、君たちは恋人を得る前に、相手に何か約束

をしたかということだ。君は相手に何か哀れむべき態度を示したかということだ。どうか思い出してもらいたい。それは三ヶ月前のことかもしれないし、四、五、六ヶ月前、あるいは一年、二年、それ以上前のことかもしれないけど。

もう思い出してくれたかい。もし本当に思い出せないのなら、君の相手に訊いてくれ。君が忘れていても彼女の方は絶対に覚えてはいるはずだ。

君が自分で口にするのが憚られるほど恥ずかしいことだろうと、ぼくにはその場面が想像できる。君はどこか静かな公園で彼女と会う約束をした。彼女に初めて愛の言葉を告げた時、君はどんな気持ちだっただろうか。興奮した？ いや！ 興奮なんてありきたりすぎる。ぼくらは驚いたり喜んだりする時、気持ちが昂ぶるのは当たり前だ。事の次第によつては、一日に何度も興奮することだってありえる。だが、君が愛を告げるために彼女を待つっている間の気持ちというのは、じつに不可思議なものだったはずだ。ある人にとつては、それはちょうどパイロットが飛行機から地面に墜ちるように、一生に一回しか経験しないものになる。空中に浮かんでいる瞬間の、一度っきりの感覚だ。もう一度息を吹き返す場合を除いて、地面に叩き

つけられれば、そんな機会はどう二度とないわけだから。

彼女の姿が近づいてくるのが草木の茂みの間から見えた時、君の胸はますます鼓動を早める。彼女が君のそばに来るやいなや、君は気持ちを炸裂させて「愛してる！」と告げる。彼女も驚きと興奮にたじろぐ。君はまるで深淵に墜ちたかのように感じるが、その深淵の底というのは一体何なのだろうか。インドラ神が君のために用意しておいてくれた虫の知らせとかいうんじゃないだろう？ とにかくそれから君は言葉にならない言葉で矢継ぎ早に彼女に語りかける。言葉にもならないその言葉こそが、君の似た約束なんだ。君は次のような、あるいはそれによく似た言葉を発したはずだ。「君はビーナスだ。忠実な僕であるぼくの美しき女王様だ。ぼくが歓喜を得ることのできる世界そのものだ。死を迎えるその日まで君を愛する。ああ、麗しき君よ」云々。そして君は彼女の胸に顔を埋める。

彼女はその言葉をじつによく覚えていて、今日に至るまでまったく忘れていない。だが、君の方もそれを覚えていなんて期待はしていないよ！ 時が経つほど、君はますます彼女に夢中になり、そしてますます傷いたりもした

はずだ。鏡を持つてきて、その時の君の様子を映してくれるような人がいるとしたら、そいつは痛い目に遭うこと請け合いだ。

若人諸君、どうか許していただきたい。ぼく自身、君たちと同じ気持ちを経験したんだ。同じ気持ちだったもの同士、恥ずかしがってどうする。ぼくは正直に言ってもう恥ずかしくはない。昔、ぼくは本気で妻を愛していた。頭の中が彼女のことではち切れそうで、彼女の胸に顔を埋めたことももちろんある。でもいまやぼくは妻に飽きてしまった。誰か文句があるなら出てこい。いまから八ヶ月前、ぼくはこう言った。「君はぼくの女神だ。ぼくは死ぬまで君を愛する」。でもぼくは変わってしまった。ぼくが間違っていて、ぼくが誠実でないと誰か言えるのか？ 誰か言えるか？ 言えるわけがない！ 絶対に。だってそれはぼくの過ちではなく、妻の方の過ちだからだ。妻はどうして最初から最後まで女神でいようとしなかったのか。妻がアツシャ「ハガード『洞窟の女』の主人公の名前」のように千年も二千年も若さを保つ存在だったとしたら、ぼくは妻に飽きたらうか。きつと死ぬまで妻を愛するに違いないさ！ でもいまでは、ぼくのチャームはどうだい。その類

もその微笑もその胸も、それを見てうんざりしない人間はいるだろうか。絶対にうんざりするに決まっている。そのうえぼくはこんなに健康なんだから、新しい相手を見つける必要があるんだ！

話を必要以上に引つ張ったことを謝ろう。ここまでで、君にはぼくの新しい相手がどんな人であるか分かっただろうか？

ぼくは時間をかけて飛び回り、そしてとうとう彼女と出会った。

彼女の名前はラクサーといって、いまはまだ距離を縮めている段階だ。上手くいくかどうかは、ぼくの求愛の言葉と彼女の優しい心の行方にかかっている。でももしこれを知ったら君はどう思うだろう。ラクサーは独身ではなく、結婚して一年になる女性で、いまも夫と暮らしている。そして彼女の夫というのが、他でもないぼくの大切な親友なんだと！

ぼくのことを仏教の傘の中にいるべき人間ではないなどと非難するのはやめてくれ。もしも君が彼女の姿を一目でも見れば、君は世俗と仏法という二つの精神が共存可能かどうか、自分自身に答えられるだろうさ。君は必

ずどちらか一つを選ばなくてはならなくなる。それはぼくも同じだ。世俗の方を選べば、ぼくは仏法を捨て去り、そして甘言をもつて彼女を抱きしめる。なぜならラクサーは類い希な美人で、ぼくの気をそらずにはいられないからだ。そうさ、だからぼくは仏法を捨てたのさ！

彼女は夫がいるにもかかわらず、見事に若々しい！ どうして何年もの間、男たちは彼女を見過ごしてきたのか。もし化粧を知っていれば、もっと美しくなることは間違いない。いや、それ以上の美貌を放つて当然だろう？ そんな美しい相手に、ぼくはどうすればいいと思う？

ぼくに最高の幸運が訪れた。昨日、ぼくは彼女に会いに行つた。彼女の夫が家にいる時間に行くようなヘマをしたと思わないでくれ。彼女は夫サムラインの親友であるぼくに、夫がどうもほかの女に熱を上げているみたいだと告げた。その時のぼくの歓喜ときたら。ぼくは彼女の気持ちなどお構いなしに、どうしてそのことを知ったのかと尋ねた。もっぱら自分の都合を優先させたかったのさ。彼女がぼくの意図に気づくぐらいまでぼくは話を進めたが、そこでひとまずお暇することにした。なぜかという、彼女がぼくに何か変だなという顔を見せたからだ。だがそう

であつても、ぼくのことを天国に導いてくれる相手として彼女を手に入れるというぼくの希望は変わらなかった。

そして今日。ぼくはまた彼女を訪ねた。今日こそは必ず目的を果たそうと心に決めていた。この女性の心は、真実と嘘の入り交じつた言葉に果たしてどこまで耐えられるだろう。

彼女はぼくの姿を見るや、すぐに駆け寄つてきた。ぼくはもう少して彼女を抱きしめるところだった。だが、彼女の顔は悲しげで、泣き止んだばかりのように赤い目をしていた。ぼくは彼女の手にはんカチが握られているのに気づいた。それは確かだった。それでしばし立ち尽くした。

「チョーイさん、あなたは夫の親しい友人です……」

それだけ言うとは途切れ、彼女は口をつぐんだ。

彼女がぼくをサムラインの親友だと讃えるのを聞いてぼくは驚いた。確かに親友であるのだが、ぼくはその親友の妻に手を出そうとしているのだから。だが、どうなるにしろ全力を尽くすと堅く心に決めたのだ。罪なことだと恥じてなるものか。現世で天国を見つけるのだ。来世で地獄に落ちようと知ったことじゃない。たとえそれが当然の結果だとしても。

そう決心すると、ぼくは友人の妻であるラクサーの前に居住まいを正し、心が高鳴るのを抑えようとした。

「そのとおり。ぼくは君の夫の親友だ。だから話を聞かせて、ラクサーさん？」

思っていたより抑制のきいた声が出た。

「昨日あなたにお話ししたことです」と彼女は答えた。

「ああ！ 君が疑っていた……」

「疑いじゃすまなかったんです」。彼女は尖った声でそう言った。「確かな証拠があるんです、サムラーンが浮気をしていることの」

ぼくの心はこれ以上ない喜びに満たされた。だが、彼女にはぼくのそんな心の内があらかじめ分かっていたはずはない。なぜならその時のぼくの顔には哀れみの仮面が被さっていたからだ。

「証拠を握ったって？」

「女の人からきた手紙です」と言つて、彼女は白い紙をぼくに手渡した。「どうぞ読んでみてください」

彼女はそう促した。ぼくは何食わぬ顔でその手紙を受け取った。手紙の内容は次のようなものだった。

敬愛するサムラーンさま

すぐに返事が欲しいとおっしゃっていた件ですが、私はいまその返事を考えているところです。ただ、二人でお会いする前に、あなたが既婚者であるということをいま一度考えていただきたく、改めてお願いする次第です。あなたには奥様がいらつしやいます。もしこの手紙であなたが奥様を愛するように心変わりしてくださったなら、もう私に会いに来る必要はありません。それでも、どうしても私を求める気持ちが抑えられないとおっしゃるのなら、夜八時にベ・イットの料理店〈天楼〉の四号室にお越しください。部屋には他に誰もいないことを約束します。あそこはタイ人向けのお店ではありませんから。

オーより

手紙を読んだぼくは嬉しくてたまらなかった。サムラーンが妻を捨て、新しい女を見つけようとしていることが。その相手の美しさはラクサーに敵うものではないだろうとぼくは思うけれども。ぼくの親友が一体なぜこんな貴重なダイヤモンドを傷つけようとしたりするのか、それだけが腑に落ちなかった。それともこれはぼくがラクサーを手

に入れるための僥倖なんだろうか？

もう一度手紙を読んでみた。手紙の筆跡はどこかで見覚えがあるような気がした。もしかすると、この手紙を書いた女性はぼくの知り合いかもしれない。だがそれが誰なのか、いまは思い出せない。なんとかして思い出そうとも思わなかった。読み終えた手紙を、残念だという言葉をわずかに添えて彼女に返した。このわずかにというのが肝だった。だって言葉と胸の内が違っているんだから。ぼくが自分の都合より他人の都合を優先すると思うかい？ あり得ないね。こんな諺がある。「最良のとき、それはいまだ」。もう一つ。「今日やれることを明日に伸ばすな」。そして最後。「チャンスは少ない、チャンスが来たらつかみ取れ」。

これだけ言えば、ぼくがこれから何をしようとしているか君にはもう分かるだろう。当然だ！ ぼくは今日中にぼくの仕事を片付けてしまわなくちゃならない。だって、これはぼくにとってまたとない機会なんだから。

「ラクサーさん」。ぼくは先に沈黙を破った。「君はどう思っているの？」

「どう思うかですって」。彼女は震えた声で言った。「私が

悪いんです。だからサムラーンは私をもういらないと」

「言っている意味がよく分からない」。ぼくは心底驚いてそう訊いた。

「何が分からないんです。曖昧な言葉でしたか？」彼女はじつとぼくを見つめた。悲しそうな瞳がぼくの心を鋭く突き刺した。「つまり、夫がこの女性を好きになったのは、夫のせいでもこの女性のせいでもなくて、私一人のせいだという意味です」

「どうして、ラクサーさん」。ぼくは本気で言った。「ぼくにはさっぱり分からない。どうして君は自分のせいにするんだ。ぼくはそうは思わない」

「そうは思わないって」。彼女はさつきよりも震えた声で言った。「私の、妻としての尽くし方が足りなかったという意味です。それに他にもきつと足りないところがあつて、それで夫に嫌われたんだと思います。もし私に非の打ち所がなければ、夫は私から離れたりはしないでしょうから。だから私にはきつと何か足りないところがあるんです」

彼女が話し終えると、ぼくの頭はますます混乱した。この人はなんて高潔な女性なんだ！ 若人諸君、聞いてくれ。夫が自分を裏切ろうとしているのに、それは自分

が悪いのであって、夫への尊敬は変わらないと言ってるんだよ。もしサムラインがラクサーに飽きたということが道に外れた考えでないとすれば、サムラインと夜中に会う約束をしている新しい恋人はよほどの美人で、特別な魅力を備えているに違いない。

「それは正しくないと思う」とぼくは彼女に答えた。「サムラインが他の女性に心を移したことは、良き妻としての義務を果たしている君のせいなんかじゃない。だってぼくもそうだけど、君の性格をよく知っている人間からすれば、これは正義のために言わせてもらうけど、君は義務をじつによく果たしている。一言たりとも非難されるいわれはないほど完璧にね。今回の過ちは、君の夫だけが責任を負うべきことだ。君の価値を分かっている愚かさのせいで、彼は道を外れたんだ。それともそっちの方面に元々持っていた気質のせいで道を外れたか、あるいはその両方だろう。ラクサーさん、ぼくを信じて。他人の心配ばかりするあまり、自分の首を絞めるようなことはやめなさい。この件は絶対に君のせいなんかじゃない。ぼくが保証する」

彼女は半分悲しげな表情で、ゆっくりと頭を左右に振っ

た。ぼくの言葉の半分は受け入れられないということだ。ただ、ぼくに遠慮したのだろう、彼女は口に出してそれを否定したりはしなかった。

「これからどうするつもり？」ぼくは改めて訊いた。

「することは一つです。私を捨てないでほしいと夫に願ひすることです」と彼女は消え入るような声で言った。

「もし上手くいかなかったら」

「できるだけ頑張ってみます。サムラインはそこまで頑なな人ではないと信じています」

「でも彼は頑固な人間にも見えるよ。もし良い結果にならなかったら、君はどうするの」

「彼にもっと尽くすチャンスをもたえるようお願いするつもりです。それから彼の新しい奥さんのやり方を辛抱強く一生懸命学びます」

ぼくはそれ以上彼女に何を訊いたら良いか分からなかった。彼女は夫をまるで神であるかのように崇めている。しかしなぜか夫のサムラインの目には妻のその美徳が映っていない。もしぼくの妻がラクサーのようだったら、あるいはサムラインをしてラクサーを捨てさせるほどの魅力的な女性だったら、ぼくは世界で一番幸福な男になれるだろう。

こんな状態でどうしてラクサーに愛の言葉を囁けるというのか。彼女の心はまるで石碑のように固いというのに。

「でも君がそれほど尽くしたとしても、君の夫は振り向いてくれないかも知れないよ。ぼくは必死になった。「もしたら君はどうする？」

「それも私の業だと受け止めます」

ぼくはすかさず言った。「ラクサーさん、何かぼくにできることはないか」

「できること……。いまこの時にですか？」

彼女は本当に強い意志を持った女性だと感じた。

「君のために何かさせてほしい。いまでも、この先でも」

「この先？」彼女は少し不満げにぼくの目を見た。「その時にしていただけることはきつと何もあります。たとえば結果が私にとって惨めなものになっても、私はあなたからも他の男性からも誰からも助けていたかどうかとは思っていません」。もう結果は分かっているかのようにそう言った彼女に、ぼくはどんな反論ができたのだろうか。「でも、いまこの時にあなたが何かしてくださるとおっしゃるのなら、ぜひお願いします。本当に感謝します」

ぼくは肩を落とした！ 彼女の言葉でぼくの道は完全

に塞がれたのだ。それでも、今日は上手くいかなくとも、まだ明日がある。ぼくは最後まで頑張るだけだ。

「感謝なんて必要ない。助けが必要なら、遠慮せずに言うてほしい」

彼女はぼくが返した手紙を開くと、もう一度それを読んだ。

「大変、もうすぐ八時です。一緒にペ・イットの料理店〈天楼〉に行ってくださいません。夫が彼女に私の欠点をどう話すのか、聞いてみたいです。行ってくださいますか？」

「喜んで」

ぼくとラクサーがその場所に到着すると、ちょうど〈天楼〉に入っていくサムラインの背中が見えた。ぼくらは彼が先に階段を上るのを見送ってから、後に続いた。ぼくは、女性の方が先に着いて待っていて、それを見たラクサーがサムラインの目の前で怒りを爆発させる光景を想像した。ぼくの期待は、きつとすぐに現実のものになるだろう。

幸運にも、サムラインが入っていた部屋の隣が空いていた。ぼくとラクサーはその部屋に席を取り、とりあえず料理を注文した。

「あなたは私の返事をお聞きになりたいのですよね？」サムラインと会う約束をした女性の声が聞こえた。

ぼくはドキツとして、それから耳をそばだてた。ラクサーも座ったままじっと聞き耳を立てた。

「そのとおりです。君の返事が聞きたい」。サムラインの声だった。「渴望していると言つてもいい。君の答えが慈悲に満ちたものであることを願っているよ」

「きつとそうなります。私はあなたに慈悲をかけなければなりませんから」

ぼくはもう一度ドキリとした！ 驚くべきことに、この女性の声は間違いなく聞き覚えのある声だった。誰だ？ 向こうの部屋から、焦りを隠せない男の声がした。

「それはつまり、君がぼくを愛していると、ぼくの妻になつてくれると、そういうことかな。チャームさん？」

今度こそ飛び上がりそうなほど驚いた。チャーム！ そんな馬鹿な！ ぼくの耳はどうかしてしまつたのか。自分の妻が浮気相手に返事をするのを隠れて聞くんて、そんなことがあり得るのか。だが、「チャーム」というのは確かぼくの妻の名前じゃなかったか？

「どうか答えてください。君がぼくを愛しているのか、ぼ

くの妻になつてくれるのかどうか」。サムラインが嘆くような声で言った。

心臓が早鐘を打ち、汗がにじんだ。だがラクサーはぼくのそんな変化にも動揺したりはしなかった。

「いいえ、そうじゃありません」。女性が真剣な声で答えた。「私は確かにあなたのことを愛していて、好意を持っています。でもそれはあくまで夫の友人としてです。あなたの妻になりたいということではありません！」

「そんな！」サムラインがうめいた。「ならどうして慈悲をかけるなんて」

「本当に慈悲をかけるからです。私はあなたの妻になるつもりはありません。考えてみて！ 私がそうするのは、あなたと私に慈悲をかけるためじゃありません。あなたの愛する奥様へ慈悲をかけるためです。私があなたの望みを受け入れたら必ず傷つくことになる奥様への。それから——」彼女はぼくらにも聞こえるほど大きく長いため息をついた。「もちろん私が最も敬愛する、そしてあなたの親友であるもう一人への慈悲をかけなければなりません。そう、私の夫であるチャョーイその人です！」

ぼくはのけぞった。ラクサーも同じだった。ラクサーは

振り返ってぼくを見た。その目は何かを問うていた。彼女が何を問うているのか、ぼくにはよく分かつていたが、想像を超えた出来事に直面したいま、こんなことが起きているこの場所で、彼女に即答することなどできなかった。これは、ぼくが友人の妻を奪おうとしている場面ではなく、友人がぼくの妻を奪おうとしている場面に切り替わったということなのか？ これはつまり、二人の夫の不実をさらけ出す場面ではなく、妻たちの夫への献身の度合いを示す場面に切り替わったということなのか？ おいおい！ ぼくにどうしろっていうんだ？

沈黙！ ぼくとラクサーの間には沈黙が流れた。二人とも固まったままだった。

沈黙！ サムラーンとぼくの妻の間にも沈黙が流れた。それは彼女の純粋な心による勝利とサムラーンの罪悪感に襲われた心の敗北がもたらした結果だった！

冷静さを取り戻したぼくは、ラクサーに撤回しようと声をかけ、その場を後にした。ぼく自身、ぼくへの誠実な愛を傾けたままの妻の言葉を、ぼくが誠実な愛を傾けることをやめようとしていた相手である妻の言葉を、これ以上聞くことに耐えられなかった。

シーラーチャーにて

我が友サムラーンさま

海辺の空はぼくとチャームの気持ちを何倍にも幸せにくれるよ。あの夜、つまりぼくが忘れることはないだろう彼女の善なるものが刻印されたあの夜以来、彼女とぼくの間の愛と誠実は時が経つほどに深まっているよ。以前までは、つまり君とぼくの醜悪さが露見したあの夜の前までは、ぼくは自分が地獄にいるように感じていたんだ。過ぎ去った日を思つては、ただただ退屈な思いばかりがつつて耐えきれなくなっていた。チャームと結婚しばかりの頃ぼくの頭の中にあつた一つの期待は、彼女の美貌がもたらしてくれる悦楽だった。けれど、外見は時間とともに変わっていく。だからチャームの美貌が衰えるにつれて、彼女に飽きたという気持ちがぼくの中に当然のように生まれていった。これがあの夜の前のぼくの本当の気持ちだ。考えてみれば、ぼくが妻のチャームに飽きた以上、ラクサーさんの方が妻よりずっと美しく思えたのは不思議でも何でも

ない。それと同じ感覚で、君も妻であるラクサーさんより多くの妻のチャームの方が特別に美しく見えたのだろう。君は、ぼくら二人の女性を見る目が公平だったと思うかい？ いまはもう正直に言えるだろう。ぼくだって同じだ。公平な目でなんか見ていなかったと、白状すべきだ。この汚れきった目を治せるのは、お互いの心だけだ！

それにしてもなんと哀れなことだろう。ぼくらが美貌というもので妻と結婚したことは！ もし他の男たちがぼくらがそうしたのと同じ基準でもって女性と結婚するなら、それは一種の消費財として女性を値踏みしたことに同じだといえるね。そういうことが一般的だとしたら、男は毎年古くなったり壊れたりする帽子や衣類を買い直すように、妻を取り替えていくべきだということになる。むなしくないだろうか？ だけど、ぼくと君は本当に幸運だった。もう少して帽子を取り替えて被ろうというところまでいって、職人が現れてその汚れを洗い流してくれた。おかげでぼくらは二人とも素晴らしい帽子をなくさずに済んだ。ここである職人つて誰のことだと思う。ぼくらの中にある正邪の意識つてやつさ！

本当はね、サムラーン。結婚前からぼくらが良き夫と

しての心構えをもっていれば、結婚後に苦しんだりすることなかったはずだ。もしいまぼくらが独身に戻ったとして、そして互いに妻を得たいと思っていると、ぼくらがまず自分自身に問うべき重要な問いは何だろうか？ それは当然、何のために妻を得るのかという問いだ。ぼくらに悦楽をもたらしてくれる美しさのためだろうか？ 馬鹿な！ ぼくらはもちろんそんな答えはしない。なぜなら、そんな答えではぼくはまた君の奥さんに馬鹿なことをやらかすだけだからだ。そして君もぼくの妻に馬鹿なことをやらかすだろう。善哉！ この手のゲームは、お釈迦様の弟子じゃない他人に任せておけばいいんだ。ぼくらが関わるものじゃない。

ぼくらがそういう答えを否定するなら、他にどんな答えがある？ ちゃんとある。ぼくらが妻と結婚したのは、妻が「香しきジャスミン」であり、ぼくらの気に入った人だからだ。ところで、ジャスミンは萎れたり香りが薄れることはないのだろうか？ 妻がジャスミンに例えられるような存在だとすれば、ぼくらは妻の美しさだけにとらわれてはいけない。だって、香りのない花は嗅ぐこともできないんだから！

もう一つ、忘れてはいけない。妻の価値というのは、花の価値ではないということだ！ 香りのなくなった花をぼくらは捨てるけれど、妻というのは、これは一万回でも十万回でも言わせてほしいけど、夫であるぼくらが捨ててはいけない！ たとえ芳香が消えようと、色がなくなろうとも、何が失われてしまったとしてもだ。妻がぼくらに誠実である限り、最後まで大切にする必要があるんだ！

ただ、これも当たり前のことだけど、ぼくらは何かに一度飽きてしまうと、それに誠意を持つて構ったり面倒を見たりしなくなる。得られるものが少ないと思うようになるからだ。だから妻への倦怠を克服するために、ぼくらは思考を高めていく必要がある。妻から悦楽を得ようとするだけではいけない。最も大切な感情、それはすなわち友情だ！

妻のことを、ぼくらに幸福を与えてくれる世話人などとぼんやり考えていてはだめだ。本来、夫婦というのは不幸を共にする友人であり、心躍るような誓いに支えられた、互いに尊敬し合うべき同志なんだ！ ぼくらにも妻にも、それぞれ国民として自立する責務があるし、シヤム

の良き国民としての意識をきちんと持つ必要がある。ぼくらが妻と結婚したことにおける重要な点は、まさにそこにあるべきなんだ！ 妻を抑え込んで、一方的にぼくらに幸福をもたらすよう強いることにあるんじゃない。そして何より大切なのは、紳士たるぼくらにとって特に重要な責務は、それを実践すべきだということなんだ。

ぼくらがその責務に目覚めた以上、たとえ妻が香りをなくし、味をなくしたジャスミンになろうとも、ぼくらは妻を取り替えるなんてことはしない。なぜなら、妻なくしてはぼくらの責務を完遂することはできないからだ。ぼくはぼくらの間に示されている責務に関して語ったつもりだよ！

だけど、多くの人が抱く疑問がある。独身者と既婚者では、どちらが幸福かという問題だ。これについて、以前のぼくはまったくもって無知だった。だけどいまなら分かる。君もそうだと思う。重要な点は、《責務》にある。そうじゃないかい？ 独身者は独身者としての責務を知り、既婚者は既婚者としての責務を知る。そうすれば両者ともに幸福でいられる。だけど、どちらが優れているかとなるとこれは答えるのが難しい。幸福というのは人それぞれ

れだからだ。一般的にいえば、〈自立した人〉になった時、幸福になるんだろうと思う。そうすれば、どんな状況にあるうとも常に幸福を選ぶことができる。だけど〈自立できていない人〉になると、独身者でも既婚者でも、既婚者から独身者になった人でも、それ以外の多種多様な状況にある人でも、多くの場合、不幸から逃れることはできない！

ぼくは本当に恵まれていると思うよ。ぼくら二人ともが、すんでのところで悪事から身を引くことができたんだから。ぼくらが危うく道を踏み外しかけていた時、ぼくらの汚れた心には良からぬ考えに支配されつつあった。いまではぼくらは心を洗い、一切の汚濁のない清廉を手に入れた。これは本当に喜ばしいことだ！ なぜなら清廉は世俗と仏法がともに目指すべき徳目だからだ。身体や言葉が美しいか濁っているかは、心次第である。なぜなら心こそが身体や言葉を操る源であるからだ。仏教の教えにはこうある。「すべての法は心が主人である。優れた心があれば、その心によつて成功する」。

この手紙をぼくはあえて長々と書かせてもらった。二人の心に警鐘を鳴らす良き道しるべとするために。

君とラクサーさんがこれからも幸福であることを祈っている。彼女に伝えておくれ。いまではぼくはチャームの方がずっと美しく、素晴らしいと感じている。でも頼むから、君こそラクサーさんの方がぼくのチャームより何倍も素敵だと思っているなんていう自慢で返してくるのは勘弁してくれ。そんなことはもう百も承知だから！ いまやぼくらは目ではなく、心でもって妻を見ているんだから。それも清廉で純粋な心の力によつてね！

親友と親友の最愛の妻に、愛と友情を込めて。

チヨイより

その手紙を書き終えると、ぼくはそれをチャームに見せた。最愛の妻はそれを熱心に読んだ。彼女の内にある感情のすべてが顔に表出した。それは隠しようのないほどの感動が心に渦巻いていることを示していた。彼女が感動しないなどあろうはずがない。親愛なる若人諸君。いまでは妻の夫は自己の責務を知り、道徳を知り尽くすようになったのだ！

【解説】

本短編「心の力」(Annat Chai)は、近代タイ文学を代表する作家兼ジャーナリストのシーブーラパー(一九〇五～七四年、本名クラブ・サーイプラディット)が一九三〇年に執筆した短編である。作者の経歴に関しては、第一一号掲載の拙訳「いと」の解説または拙稿「タイ人作家シーブーラパーの初期言論活動…一九二九年から一九三二年立憲革命前まで」(『アジア地域文化研究』一一号、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部アジア地域文化研究会、一七〇～一九二頁)を参照いただきたい。本短編は、一九七三年に『シーブーラパー短編集』として他の短編とともに出版された。今回の翻訳にあたっては、生誕一〇〇周年記念に再版された『短編集…人間の宿命』(二二〇〇五年)を底本とした。

シーブーラパーは、社会的弱者への共感を示したり民衆による社会変革を喚起するような小説を書いた人道主義作家として知られているが、今回訳出した「心の力」は、結婚と夫婦関係をめぐる価値観が主題となっており、彼の他の作品とは趣を異にする短編である。妻との結婚生活に飽きた主人公チョーイは、新しい妻を探すことを決

心する。そして親友の妻であるラクサーに近づき始めるが、彼女から夫サムランが浮気をしていると相談を受ける。自分にとって有利な展開になると踏んだチョーイは、ラクサーと共に浮気相手との面会場所に潜入するが、そこにいたのは自分の妻だった、という展開である。

この短編を一言で言えば、「結婚の夢から覚めた男の妄想と反省の記録」であろうか。結婚は地獄だと語る悲壮感と独身者への嫉妬心に満ちた粘着質な主人公の語りに、そして親友の妻に手を出しかけたにもかかわらず、高潔で寛大なる妻によって悪の道から引き返し、その後は改心して夫婦関係の真理を悟ったと語る究極のポジティブ思考に、訳しながらもたびたび苦笑してしまった。妻に飽きて新しい女性を求めきまよう夫側の心理描写が悲しいほどリアルであるのに対して、妻側の言葉や態度が現実離れたものであるところにブラックユーモアを感じずにはいられない。

いずれにせよ、シーブーラパーの他の小説に比べると、本短編がかなりの異彩を放っていることは間違いない。本短編は、彼が新たな時代の夫婦のあり方に関して、対等な立場の同志として尊敬しあうべきであり、近代国家を

支える自立した国民としての社会的責務を認識すべきだ
という理想を示した初期の小説であると位置づけること
ができよう。ただ訳者としては、一人の男の饒舌な自己
陶醉を描いた喜劇として楽しんでいただければ幸いであ
る。(訳者)

テキスト：

ศรีบูรพา „อำนาจใจ“

ชุดเรื่องสั้น वासनाมนุษย์

กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์ดอกหญ้า

2005, pp. 67–91.